

書評

新井達太 編

心臓弁膜症の外科 (第3版)

慶應義塾大学名誉教授

川 田 志 明

新井達太先生の編集による『心臓弁膜症の外科』が4年ぶりに改訂された。1998年が初版であり、2003年の第2版の改訂に際しては、あと数年は改訂の必要がないものと考えられたようだが、埼玉県立循環器・呼吸器病センター総長の職を辞されてからも心臓外科関係の学会や研究会に精力的に出席されて内外の新知見を吸収されたことで、本書の改訂編集に取り組む決意をされたようである。

第3版の改訂の主なもの、一つの手術項目に複数の執筆者を迎え、異なる手術法を列記し読者諸氏が手術を組み合わせる自由に取り捨選択できるように配慮された点である。このように全体で21人の新進の執筆者を加えて、弁膜症手術の新しい手術手技の各種を公平に紹介していることが大きな特徴といえる。

また、手術に必要な大動脈弁・僧帽弁周囲の局所解剖など手術の基本となる領域についてもページを割き、さらには弁膜症手術には心エコーによる診断が欠かせない検査法であることから、内科のエ

コー専門家に診断のほか手術適応などについても幅広く解説をお願いするなど隅々まで行き届いた配慮がなされている。

手術手技としてはRoss手術、homograft弁によるAVR、stentless valveによるAVR、AAEに対する手術を取り上げ、特に狭小大動脈弁輪に対する手術については一般的な弁輪拡大手術とは別に、有効弁口面積を考慮した「弁輪拡大をできるだけしない弁置換術」を5人の執筆者が担当して、互いの考えの違いが比較できるように思い切った取り組みをされている点も新鮮である。

さらに、僧帽弁閉鎖不全に対する弁形成術の適応拡大とともに術式ごとの遠隔成績を示すようにされ、読者諸氏の術式選択に役立っている。最近になって導入されたedge-to-edge technique (Alfieri) や loop technique などの新術式も加え、総計9人の術者が執筆を担当している。

一方で、術後管理の一端として人工弁置換術後に不可欠の抗凝固療法を別枠で取り上げたこと、要

所に one point advice や pitfalls を配して手術のコツや注意点を説いたのは、若い読者への気配りであろう。圧巻は編集者自身による最終章の「人工弁」であり、人工弁の変遷と歴史、生体弁移植の歴史などは、SAM 人工弁の開発に携わった研究者としての信条が偲ばれ、tissue engineering 心臓弁、percutaneous 心臓弁、transcatheter 心臓弁などごく最近の文献も読破され、人工弁置換術の将来を俯瞰されているかのようである。

これらの新機軸は、新井先生が顧問を務められ小生も代表世話人の一人である「関東心臓手術手技研究会」において時折主題として「僧帽弁手術」が選ばれ、迫力ある大画面で術式が供覧された後に活発な討論が行われるのであるが、最前列で熱心に聴取され、時には自らも発表された諸々が改訂の構想に役立ったものと思われる。

最強の執筆陣による最新の知見を収載して大幅に改訂し、弁膜症手術のポイントをビジュアルに捉えることができるようカラー写真を多用した660頁にも及ぶ弁膜症手術のバイブル的な単行書である。

〔B5 頁680 2007年 定価29,400円(本体28,000円+税5%) 医学書院刊〕

* * *